最後の決闘者

一番谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の決闘者

【Ｎコード】
Ｎ０８２１Ｔ

【作者名】
一番谷

【あらすじ】
１０年前、ぼくは人を殺した。
１０年後のゴールデンウィーク明け、ぼくは何かに対する期待に胸を躍らせて、学校に登校した。
これは再会から始まる決闘者達の物語。

プロローグ　～休みの終わり～

「いやだ！……いやだよ！」
ざあざあざざざ、ざざざのざ。
雨が降りしきる中で、ぼくは必死にそう言っていた。
泣きながらそう言っていたんだ。
でも……
「真理……君は優しいね。でも、誰かがやらなくちゃいけない事なんだ」
「誰かがやらなくちゃいけない……だから、せめて……君に」

彼は微笑んでいた。誰よりも優しい笑みを浮かべていた。
彼のその顔を見た瞬間、ぼくは金縛りにあったようになってしまって、動く事が出来なかった。でも
ぼくは見てしまったんだ。
彼の顔が哀しみに染まる、その様を。

「ぼくは……」
ぼくは、動くしかなかった。
ぼくは、雨にぬれた地面を踏みしめ、一歩踏み出す。
十年前の５月６日、ぼくは人を殺した。

□■□■□■□■□■□■□

ぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴ……ぴ
２０１１年５月６日金曜日午前７時３０分１７秒１７
この僕、日景（ひかげしんり）真理は辟易していた。
ベッドで布団にくるまれたまま目覚まし時計を探し当て、それを見ずに止めるというノーベル賞ものの偉業を成し遂げたぼくは、思

いのほかブルーな気持ちだった。
（何で朝が来るんだろう……いらいらする）
朝は爽やかだった。大地に平等に降り注ぐ太陽と、それを受けて生命の輝きを発散する植物。空を飛び楽しそうに鳴く鳥達。
家の近くの電柱に止まった小鳥のさえずりと、羽ばたく音。
この上なく爽やかで気持ちのいい朝だった。ぼくが……寝起きでなければ。
（チクショウ……太陽なんて燃え尽きてしまえ）
ぼくは機嫌が悪かった。理由は昨日夜遅くまで起きていたから。俗に言う寝不足と言う奴だったが、ぼくは華麗に太陽と地球に責任を転嫁した。
ゴールデンウィークが終わった今日、今までの不節制は休みボケという形で表れていた。
（何で朝が来るんだろう……いらいらする）
終わらない朝、ループする思考。襲う眠気。終わった休日。
あたまをがしがしと掻き、あくびをする。
（……そうだ……今日は学校を休んで夢の中の神に文句を言おうじゃないか）
そしてぼくは一つの真理に辿り着く。結論は神への責任転嫁だった。
なんて天才なんだ。天才すぎて鼻血が出そうだ。
きっと昼には目が覚めるだろう。それまでまどろみの中でたゆたっていよう。
学校なんて知らない……。今日は休もう……
（……おやすみなさーい）
そう言ってぼくは夢の中にダイヴし……
「起きろ」
ようとした瞬間、扉がばん！という音を立てて開かれた。
（誰だよ……迷惑だなあ……）
ぼくは突然の来訪者よりも、勢いよく開けられた扉の方が心配な

のだった。
　っていうかそんな事いいや。眠い……おやすみなさー……
「起こしに来てやったぞ」
　そしてほどなくして、布団がばさあ！という音とともに引っぺがされた。
　やはりぼくにも平等に降り注ぐ太陽の光。
　太陽の光が瞳に突き刺さり、さらに朝の低温が体を貫いた。
　身悶えするほどの刺激がぼくの体を苛んだ。

　文字通りぼくは身悶えた。
「やめてええええうわあああああ焼かれる燃え尽きる死ぬうううう」
　愛用のタオルケットがぐちゃぐちゃになる。
　そりゃそうだ。今ぼくはベッドの上で顔を押さえて身悶えているんだから。傍から見るならシュールすぎる光景だろう。
「何バカな事やってるんだ。さっさと起きろ」
　ほらね。ご丁寧にもそう言って下さった。
　ぼくは身悶えながらも起き上がり相手を見ようと必死で動くけど、朝がだるすぎて起きる事が出来ない。
　きっと相手は冷めた目でこちらを見ているのだろう。
「……ひどいや兄さん」
「悪いな、ロイヤルストレートフラッシュだ」
　やっと薄目を開けて相手を見ると、そこに居るのはやはり我が兄上《お兄ちゃん》だった。
　家の中でこんなバカなかけあいやってくれる人物も、ぐちゃぐちゃになった布団の上で身悶える少年にこんな冷たい事を言える人物も、お兄ちゃん位だ。
　そう。このぼく日景真理（ひかげしんり）のお兄ちゃん、日景大和（ひかげやまと）位だ。
　ひょろりとした手足に白のシャツ、黒のスラックスと黒いジャケット。
　喪服かと見紛う服装をし、常時三白眼で何故か女の人にモテるこ

の男こそ、ぼくから布団と言う名の愛しのハニーを奪い取った張本人である。

「お前、今日から学校だぞ。大丈夫か？」
そう、今日は愛すべきゴールデンウィークが終わった日であった。
お兄ちゃんはため息をついてからそうあきれた様に言った。ぶっちゃけその顔で呆れられると怖いよ。
ぼくはそこはかとなくそう言ってみた。すると頭を小突かれたよ。こんちくしょう。
「飯食えってさ。学校遅れるぞ」
そうだった。学校があるんだった……忘れてた。
「お前……うげーって顔してるぞ。調子悪いのか？」
「ううん……学校が苦痛なだけ」
「あっそ。心配した俺がバカだったよ」
失礼な。って今時間何時だろう。ぼくは、何気なく時間を見ると時間は7時55分に差し掛かっていた。
「やっぱい……遅れる」
やっぱり最悪かもしれない。ぼくは目の前に迫る遅刻という事実から遠ざかる為にフルスピードで学校の用意を開始した。
そんな様子を見て、お兄ちゃんはため息をついた。ほっとけ。
ゴールデンウィーク明けの学校が始まる日、ぼくは何かが始まる。そんな期待に、胸を躍らせていた。

プロローグ　～休みの終わり～（後書き）

感想、悪い所の指摘など、作者の成長の糧になりますのでくださると嬉しいです。
ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

第一話

２０１１年５月６日金曜日午前８時１分５６秒６７

「うがががががが」

寝ぼけた頭で起き上がり、着替えたらもうこんな時間。

紺色のブレザーとカッターシャツ、ブレザーと対になったズボンに身を包んだ真理はどたどたどたと階段を下りる。

二階にある自分の部屋からだ。

真理は何度も転げ落ちそうになりながら真理は一階の食卓に急いだ。

一階に着くと、お母さんがキッチンに立っていて、大和とお父さんが食卓につき朝食を頬張っていた。

母親の名は『日景理香』《ひかげりか》、大和と真理（しんり）の母親で、美女では無い。だが、その柔らかな物腰と雰囲気は誰にでも優しいその雰囲気と相まって、周りを和やかにしてしまう不思議な人だ。

自分の母親にこんな感想を抱いてしまう自分はどうなんだと昔真理は悩んだ事があったが、今はそれも昔であった。

キッチンからはトーストとウインナーの匂いが立ち込めていて真理はそれを嗅いでからテーブルについた。

テーブルには網目が入ったトーストとこんがり焼けたウインナー、サラダがあった。

だれがどこから見ても、健康的な朝食であった。

「遅い。三十点」

「何がさ……」

「おはよう真理。朝食、用意してあるからね」

テーブルに着くと軽口を吐く大和。そしてそれに連なるように母の発言。

「はーい」
真理は朝食を口に運んだ。

□■□■□■□■

「へぇ……」
朝食のトーストを食べていると、ふいに新聞を読んでいたお父さんが心底驚いたような声を上げた。
父親の名は『日景真一郎』《ひかげしんいちろう》、我が家の大黒柱。我が家に勧誘業者や訪問販売が寄り付かないのはほとんどこの男が起因している。
がっちりとした体型の肉体にそれに見合った重厚な声と性格とそれを強調するかのような強面。
正に、かたぶつや親父といった表現の似合うこの男が「へぇ」なんて発言する事は、滅多にないことなのだ。
だから当然周りも反応する
「どうしたの？お父さん」
「どうしたんだ？親父」
「どうしたの？真一郎さん」
「いや……そんなに反応されると困るんだが……」

真一郎は困ったように頭をかくと、広げていた新聞をばさりと真理たちの方に渡してきた。
「近くに富豪が引っ越してきたみたいだな」
そう言って真一郎は新聞の一面を指差した。
その前にトーストをバクリと食べきった真理は指差された記事に目を落とした。
「大企業のご令嬢、病気のため療養か……何これ」
記事の見出しには『大企業のご令嬢、病気の療養のため転居か』と書かれていた。

「何々……転居の理由は如月重工のご令嬢、如月杏子（きさらぎきょうこ）氏の体調が優れない事を考慮した結果か……。もの好きな奴だ」
大和が「つまらん」と元から鋭い三白眼をさらに鋭くして切り捨てた。

「お兄ちゃん……そんなにここって自然豊かだっけ……？」
「知らんよ。金持ちの考える事なんか」
そんな様子の横から割り込んで読んできた大和に真理は質問するが、返ってきた答えはやはりそっけないものだった。
真理はますます分からなくなったが、金持ちっていうのは分からんね。というこの一言で納得してしまうのだった。
真一郎も、「なんで日本の大企業の一族がこんなところに……」と奇妙なものでも見たかの様な表情で言ってコーヒーをすすっていた。そして――
真一郎は、うぉっほんという漫画でしかしないような咳のつき方をわざとらしくやって、真理の方を見た。
「……？　どうしたの？お父さん」
いきなりうぉっほんと漫画のような咳をつき、こちらを見てきた真一郎を真理はきょとんとした顔で見返す。
「……学校、大丈夫なのか？」
その瞬間、真理の表情が凍りついた。ばっと真理は身をひるがえし、時計を見る。
時刻は８時１５分。間違いなくこのままいけば遅刻であった

「あっ！遅刻」
急いで朝食を胃の中におさめ、かばんを持って走りだす。
その様子を、真理以外の家族全員はまるでスポーツ中継を見るような表情で見つめていた。
「やっぱりな」
「もう！何で言ってくれなかったのさ！」

まるでわれ関せずの表情でそう言った大和に真理が突っかかる。
「だって俺関係無いし」
「さいですか！……あぁ遅刻する～」
そして玄関に向かって走り出した弟を見て、大和はため息をついてから
「……送って行ってやろうか？」
そう言った。
それに当然真理は「お願い！」と答え、大和は「貸しな？」と言いながらの悪い顔をゆがめてにやりと笑った。

第一話（後書き）

ご指摘・感想
絶賛募集中です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0821t/

最後の決闘者

2011年5月14日17時10分発行